

フォー스デイメンション
過去世との闘い

岡地 俊明

世界は第三次世界大戦を恐れていたが、プラクティカルなミサイルが一発も発射されることなく、平穩無事に二〇五〇年が訪れ、二〇八〇年には、全世界が国際連合に加盟し、新たな国連憲章が打ち立てられたのだ。そして翌年には全世界平和友好条約が正式に結ばれ、安寧秩序の世が訪れたのであった。日本はジャパンという呼び方が一般化され、深く大衆に根付いていた。

自動車が空を飛んでいる時代だと思われがちだが、アスファルト舗装された道を走っているのは幼稚園生にならなくてもわかることだ。タイムマシンなんて物はもつてのほかだ。機械に征服されることを恐れた人類は進む科学技術を法という名の手段で歯止めを刺したのであった。一九九〇年代の人間が今の世を覗いてみてもなんら、違和感を感じないだろう。

こんな時代に訪れた平和の裏側では秘かに亡霊軍の魂の目論みが進行化されつつあった……

例年よりも湿度が高く、夜になっても歩くだけで大粒の汗がしたたり落ちてくる。どこかで鳴く虫の声が余計に夏の暑さを感じさせる。

そんな中、スーツを着た仕事帰りの中年男性がいつもの人気がない路地を歩いている。チカチカと電球の切れかけた外灯が脇の雑木林を薄暗く断片的に照らし出している。空は虚しいぐらいに暗くて、月だけが遠慮がちにゆらゆらと揺れている。

中年男性は鞆から煙草を取り出して火を点けた。男は溜息混じりに煙を吐き出すと、薄暗い道

の向こうに白くぼやけた物を見付けた。

「何だ？」

白くぼやけた光は、ゆっくりと男の方へと向かって来ている。

男は少し、恐怖に怯えながらも道を進んでいく。この道を通らなければ、家に帰るまでにえらい、遠回りになってしまうのだ。

白くぼやけた光と、10mぐらいの距離まで来ると、男は腹の底から叫び声を上げた。

「ああ！」

初めて経験する恐怖に男は踵を返し、逃げようとした。ところが、足に力が入らない。まるで、自分の体ではないようなほど身体機能がうまく働かない。頭の中で「助けてくれ！ 助けてくれ！」と叫んでいるのだが声が一寸もでない。とうとう、男はその場に座り込んでしまい、これは夢なんだと自分に言い聞かせてみたが、体の至る所が痙攣し始め、大きく瞳孔が開いてくるのを感じた。これは夢ではない。

その光……白い着物をきた女の亡霊軍と目が合うと、男は一度大きく体を反り返し、メキメキと骨の碎ける音と共にこの世を去った。亡霊軍の仕返しの時が今、こうして幕をきった。

目が覚めると、ひどく頭が痛い。リアリティーにとんだいつもの夢をいつものように痛苦な思

いで見たのだ。僕は中学生の頃から、白いワンピースを着た十代後半ぐらいの女の子の夢を、毎日見るようになっていた。

痛む頭を両手で抑えながら、隣の部屋に行くと祖母が日本茶をすすりながら、テレビの前でじつと何かを考え込んでいる。あまりに静止しているもんだから、その姿は台座に無心になつて座つている釈迦牟尼を思わせた。

「どうしたのお祖母ちゃん？」

「あら、ダイキおはよう。このニュース見てちょうだいよ」

昨夜、午後十時頃、横浜市神奈川区の路上で、衣服や装飾品などが残されたまま、五十代男性が失踪。

「やだね、同じ区内よ。妙なことがあるもんね」

「そんな、大袈裟なことじゃないでしょう。世の中が変わり者なんて、腐るほどいるんだしさ」
「そうだけどね、ダイキも一応、気をつけるのよ。万が一つてことがあるからね」

僕は頷いて、煙草に火を点け部屋に戻った。

僕は小さな頃から、祖母とこの3DKの安普請な木造アパートで二人暮らしをしている。母親

は僕が生まれた直後、直ぐに交通事故で死んだときいている。父親はどうやら生きているらしい。だが、僕はどんな人なのかわからない。顔もわからなければ、どんな性格なのかも知らない。写真だって、一枚もこの家にはない。そんな父親が毎月、三〇万円を生活費として、祖母に送りつけてくるのだ。

僕は父親が大嫌いだ。自分と祖母をほったらかしにしておいて、本人は一体、何処で何をしているのだろうか。

僕は灰皿に煙草を押しつけて火を消し、ベッドに横になって、夢にでてくる白いワンピースの女の子について考えてみることにした。だけど、それは全く無駄な作業だということに気がついた。うまく整理がつけられないし、考え込んでも何も自分にプラスになることなんてない。夢の中では、大体、僕と白いワンピースの女の子は恋人のように過ごす。そして、僕と彼女は二通りの死に方をする。夢は一体、何を示そうとしているのだろうか。何かへの導きなのか？ 何かしらの宣告なのか？ あるいはただの夢なのだろうか？

しばらく、横になったまま色あせた天井をぼんやりと見つめていると、扉の外から祖母が「お買い物に行つて来るね」と言つて外に出掛けて行つた。僕はベッドから起きあがり、机の上のパソコンを起動させ、インターネットを接続させた。寝ぼけ眼に画面が眩しい。目を一度こすつて、欠伸をした。しばらく、焦点の合わない目で画面をぼんやりと眺めているとブロードバンドに記

載されているニュースの欄に速報が流れた。なんだろう、誰か死んだのだろうか。僕は目を凝らして読んでみた。

「今日、未明、横浜市保土ヶ谷区の閑静な住宅街で女性の衣服や装飾品などが残されたまま二十代女性が失踪……さつきと同じパターンだな」

何かあるのかもしれないなと僕は思った。まだ、お昼で外も明るいし、人気だつてある。何が起きたのか。これは何かの事件かもしれない。では一体誰がこんな白昼に大胆な犯行におよぶのだろうか。僕は買い物に出掛けた祖母が少し心配になった。

トイレに立ち上がるとした時に祖母が帰ってきて僕は安心した。祖母は長ネギの飛び出したスーパーのビニル袋をぶら下げて「ただいま」と言った。

「おかえり」と僕は言つてトイレに入った。

「そうだ、お祖母ちゃん。ちよつと部屋来て」

「どうしたの？」

祖母は重たそうな足を引きずりながら僕の部屋に来た。

「これ、これ。これ、見てよ」

祖母はパソコンの画面を真剣な眼差しで読んでいる。祖母が買い物にかけている間に同じよ

うな事件が五件もつづけておきていた。警察は何も手がかりを見付けることができず、捜査は困難をきわめているらしい。

「どうりでお巡りさんをたくさん見たわけね」

「それにここを見て」僕は画面を指さした。

「同じ町内じゃない。やだ、心配だわ。戸締まりしましょう」

二人で慌てて、窓のクレセントをしつかりとかけ、カーテンを閉め、玄関の鍵をかけ、ドアチエーンもしつかりとかけた。これだけすれば安心だ。

「でも、おかしいわね。被害者は東京と横浜にしかないわね。それに同じぐらいの時間帯ってことは複数犯ってことね。物理的にこんな短い間に東京と横浜をいききなんかできやしないわ」

祖母は眉をひそめ、眉間によった皺を指でなぞった。

「でも、これは本当に人間の仕業なのだろうか。犯人は何が目的なのだろうか？　もしかすると、みんな同時刻に気が狂って、服を脱ぎ捨て何処かへと消えていったとか」

「そんなことあるかしらね。精神的に滅入っている所があるにしてもみんな同じような、錯乱の仕方なんかしないと思うけど。いずれにしても、気味の悪い話ね」

「まったくだね」

僕は冷蔵庫からビンのモスコミュールを取り出して、煙草に火を点けてから、ふたを開けた。

「ダイキ、未成年なんだから、あんまり、煙草もお酒も飲まないの」選挙権は十八歳からになったが、煙草やお酒は二十歳からというのは、昔と変わりない。祖母が呟くのも仕方がないことだ。「でも、お祖母ちゃん。僕はもう、十八歳だよ。煙草もお酒もなんともないさ。つて言い訳になつてないね」

「今時、若い子で煙草もお酒もやる自体が珍しいんだからね」

「それも、そうだけどね」

僕は最近、コンビニエンス・ストアのアルバイトを辞めてから、こうして家でお酒を飲むことが多くなっている。だけど、一度も酔ったことがなく、どんな感覚になるのかしりたくてたまらない。半分その為にお酒を飲んでいようなもんだ。それに、この、お酒の強さは母親譲りのものか父親譲りのものなのか、それすら僕にはわからないのだ。

僕は部屋に戻り、再びインターネットを接続させた。モスコミュールを飲み終わりそうになると、速報ニュースが入った。

今日、午後、二時半頃、横浜市神奈川区K町で女性の……

またかと僕は思った。

僕は不安が募る反面、好奇心に煽られている。この事件が妙に気になる。気になるといふよりは、何か引つかかる物があると言った方がいいかもしれない。外へ出て、この目で真相を確かめてみたい。そう思っていると、また速報ニュースが入った。

今日、午後、二時四十五分頃、神奈川区M町で男性の……

「すぐ、近所だ！」

とうとう、僕は興奮を抑えきれなくなり、バイクの鍵を握りしめ部屋を飛び出した。木製の扉がバタンと勢いよくしまり、その音に祖母が直ぐに気がついて、痛む膝も忘れてすつ飛んできた。

「ダイキ！ 何処行くの？」

「お祖母ちゃん！ 僕見てくるよ！」

「ちよつとダイキ、よしなさい！」

祖母が僕の腕をぎゅつと掴んだが、僕はそれを振り払って外へ出た。室内から、祖母が「待ちなさい！」と叫んでいたが、そんな言葉も僕は無視をした。バイクにまたがり、事件現場を探した。

やつと、事件現場にたどり着くと警察の検証で、あまり近寄ることはできなかった。

辺りにはキープアウトという黄色いビニルテープが張り巡らされ、パトカーが何台も止まり、野次馬がわんさかと群がっていた。なんとか、人の隙間から覗いてみると、そこには、パソコンで見たままの形で、衣服や装飾品などが残されていた。人が横になって、中身だけが消えてしまったかのようだった。袖やズボン膨らんでいたし、腕時計も手首らへんに残されていた。

僕は益々高ぶる気持ちを抑えながら家へ帰った。

バイクを止め、赤錆が浮き出ている腐食の進んだ階段を上り、ドアノブに手をかけたが、鍵が掛かっていたので、インターホンを鳴らして祖母を呼んだ。少し経っても出てこないの、何度か鳴らしてみた。それでも出てこない。買い物にでも出かけたのだろうか。いや、そんなはずはないだろう、何しろさつき買い物に出かけたばかりなのだから。ひよつとすると何か買い忘れでもして、もう一度スーパーにでも行ったのだろうか。それともトイレにでも入っているのだろうか。僕は仕方なしに財布の中から鍵を取りだし、シリンダーに差し込んだ。かちやりと鍵が開き、中へ入った。静まりかえった室内に冷蔵庫のモーターの音だけが響いている。

「何だよ。お祖母ちゃんいないの？」

返事がない。やはり出掛けたのだろうか。